国語　実践事例２

問いをもち，表現方法を吟味し，伝える力を高める子ども

― 中学３年「パブリック・スピーキング」の実践から ―

１　単元のねらい

聞き手の実態に応じて発表内容を考え，語句や文を効果的に使い，説得力のある発表をすることができる。

２　授業の構想

(1) 子どものとらえについて

本学級は，落ち着いた態度で学習に取り組むことができる生徒が多い。今まで「話すこと」の学習では，スピーチやプレゼンテーションを行い，自らが伝えたいことを聞き手にきちんと伝えることをねらいとして学習してきた。その中で，話し方や話す態度について繰り返し学習してきたにも関わらず，聞き手のことを考えずに，自分のペースで話す生徒が多い。それは，大勢の人の前で話すことに苦手意識を抱えているのが原因だと考えている。

その中でも，自分が持つ知識や自分独自の考えを発表することには意欲が高くなる面が見られる。ただ単に情報を伝える活動よりも，「自分はこう考えている」と主張することを好む傾向がある。自らの発表を通して聞き手の気持ちをゆさぶりたい，心情を少しでも変えたいと思うことが出来れば，意欲的に表現を工夫したり，発表を吟味したりする姿が期待できる。生徒が「みんなに話したい」という思いや，「こうなりたい」という願いをもつこと，自らが考える発表の到達点へ見通しをもって取り組むことで大勢の人の前で話すことへの苦手意識を乗り越え，意欲的に発表する姿を期待したい。

(2) 本単元の内容と国語科で考える問いをもち追求する姿との関わりについて

本学校園国語科では，「話すこと・聞くこと」の学習を行うときの「一人一人が問いをもち追求する姿」を次のように考えている。

○ 何をどのように伝えたり話し合ったりすればよいか，見通しをもとうとしている姿

○ 伝え合ったり話し合ったりしたことを振り返り，自分や他者の選んだ方法・手段について吟味する姿

本単元で行うパブリック・スピーキングという発表形式をほとんどの生徒は聞いたことがない。そこで，パブリック・スピーキングとは，聞き手の価値観を変えたり心情を揺さぶったりするものであると定義する。聞き手の価値観や心情を揺さぶる目標に到達するために，どんな発表がよいのかを思考する中で，発表の内容や述べ方，表現の工夫を思考する姿が出ると考えている。

また，どんな発表が聞き手の価値観を変え，心情を揺さぶるかを友だちと一緒に考えることで皆で共有できる工夫が出てくると期待している。その「言語化した工夫」に沿って，それぞれが考えている原稿や表現の仕方について友だちと意見交換することができる。そして，聞き手としての立場からの意見や感想をもらうことで，どうやったらより聞き手により伝わるか問いをもち内容や表現をよりよくしようと吟味する姿が見られると考えている。

(3) 本単元の内容における問いをもち追求する姿を育成するための具体的な手立て等について

生徒の意欲を高めるために，本単元において二つの設定の工夫を行った。

一つ目は，目的意識を明確に示すことである。前述したように生徒の実態として，情報を伝える活動よりも，自らの意見を主張することを好む傾向があると考えている。そこで，社会生活の中から題材を設定し，自分の考えを主張できる発表形式であるパブリック・スピーキングを選び，「聞き手の価値観を揺さぶり，心情に訴えかけて考え方を変える」という目的意識をもてるようにする。そして，相手の価値観が，変わったかどうかを即時に知るために，「クリッカー」というＩＣＴ機器を活用する。発表後，発表を聞く前と考えが変わったかどうか，質問にクリッカーを用いて回答し考えや価値観が変わったかどうかをボタンを押し人数をグラフで表示することで発表前と発表後の聞き手の意見の変化を捉える。それが，話者が目的を果たせたかどうかを知る手立てとなり，自らの発表を振り返られると期待している。

二つ目は相手意識である。話をする相手が，発表テーマにどういう価値観や考えをもっているかを知ることで，自らの発表の内容を工夫しやすいと考えた。事前にアンケートを取り集計し，聞き手の実態を把握し，それをもとに内容を考えられるようにした。そして，発表後その数字が自らの発表を聞いた後にどう変化したのかを知ることにより，発表内容や表現を吟味できふりかえりが効果的にできると期待している。

また，生徒が見通しをもつためには，到達目標が必要である。その手立てとして，単元の初めに優れた話者のパブリック・スピーキングを視聴し，その発表のよさを考えられるようにした。加えて，今までの発表活動（例：スピーチ）と今回の発表活動における違いを整理することで，例示した話者が「印象に残るフレーズ」や「繰り返し（リフレイン）の表現」，つまり文や語句を効果的に使って発表していることに気付けるようにした。そして，その気付きから発表の構想や伝え方についてペアやグループで発表し合い，意見交換をして，友だちの発表を聞き自分だけでは考えられなかった観点から自らの発表を吟味できるようにした。

３　展開計画　（全10時間）

次	主な学習	時	具体的な学習・内容
1	・パブリック・スピーキングとは何だろう？ ・話し手のどこがすごいのかを考えよう。 ・パブリック・スピーキングの特徴を整理しよう。	1 2	・パブリック・スピーキングの具体的な例を見る。 ・話し手の工夫や話し手のよいところを考え，目指す話し手のイメージをふくらませる。 ・パブリック・スピーキングと既習の発表活動との違いを整理し，将来的にどの場面で用いるかを考え，学ぶ意義をもつ。また，発表で意識することを班で意見交流し焦点化する。 ・パブリック・スピーキングは聞き手の価値観や考えを揺さぶる言語活動であることを知る。
2	・発表のテーマを決めよう。 ・同級生の価値観や考え方を知ろう。	3	・社会生活の中から題材を集め，「○○のよさ」という観点から話したいテーマを決める。 ・聞き手の実態をつかむアンケートを考え，アンケートを行う。
3	・聞き手の実態に合わせた発表を考えよう。 ・意見交流をし，発表をよりよいものにしよう。	4 5・6	・聞き手の実態を知り，発表内容や表現の仕方を考える。 ・発表内容を原稿に書き，１次で学習した聞き手の価値観や考え方を変える工夫を取り入れる。 ・構想した原稿を生活班で読み，付せんにアドバイスをもらう。
4	・パブリック・スピーキングをしよう。 ・友だちの発表を聞き，クリッカーを用いて自らの立場を表明する。	7 8 9 10	・話し手としてパブリック・スピーキングを行う。 ・聞き手として，他者の発表を聞き，クリッカーで発表を聞いた意見を投票する。よかったことをまとめ，自らの発表に利用できることを見付ける。 ・話し手の発表によってなぜ聞き手の考えが変わったのか。変わってないのかを考え，自らの発表に生かせるようにする。

4　授業の実際

(1) どのように伝えたり，話し合ったりすればよいか，見通しをもとうとする姿が見られるように行った手立て

本単元における到達目標を生徒がイメージしていないと活動に見通しをもつことはできない。そこで，１時目にパブリック・スピーキングという発表形式のイメージと到達度のイメージをもつために，具体的な例を見せた。「相手の価値観や，心情を揺さぶる」という目的意識のもと，話している映像を探したが，日本語の話者の映像というものはなかなか見つからなかった。文化の違いとともに，日本語の話者が苦手としている部分なのだということを感じた。具体例として生徒に見せたのは，３名のパブリック・スピーキングである。教科書に掲載されている「キング牧師の演説」「セヴァン・スズキの国会でのスピーチ」，「スティーブ・ジョブズのiphone発売時のプレゼンテーション」である。映像を見た生徒の反応として，「こんな風にスピーチで人の考えを変えることができるなんてすごい」といったあこがれの感想をもつものや，「自分もこんな風に話してみたい」という単元に向けて意欲的な感想をもった。

また，その映像から，今回の単元で学ぶ意義を全員で考え意見を整理しねらいを絞っていった。今までの国語の時間で行ってきた話す活動と今回のパブリック・スピーキングという活動の差は何かということを生徒に投げかけた。これは，本単元の中で生徒が新たに学ぶ学習内容であり，焦点化していくことにより「内容」や「話し方」のふりかえりの視点となっていくものである。

図１は，その時の生徒の意見である。クラスによっては，具体的な意見を出しているところ，抽象的な意見が出ているところ等様々であった。一回，映像を見て，その後すぐに意見を出すと言ってもなかなか意見や考察に深まりが見えず，今のままでは生徒がふりかえりをする時に視点となるには不十分だと考えた。今回の単元のねらいとして，生徒に付けたい力は，「語句や文を効果的に用いて発表する」ということであった。「説得力のある発表をするためには，どのように発表内容を考えていけばよいのだろうか」といった生徒がもつ問いに対して，「こういう視点で考えるとよい」といった視点をたくさんもって欲しいと考えた。そこで，次時にパブリック・スピーキングをする上でのポイントをさらに時間を取って考えた。グループごとに，ＫＪ法を行い，一つの項目を一枚の付箋に記入し貼付けた（**図２**）。

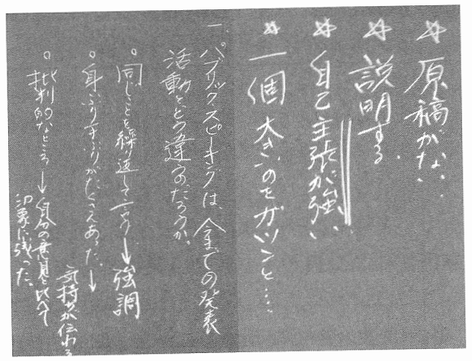

図１：今までの発表活動を考えたときに，出てきた生徒の意見をまとめた板書

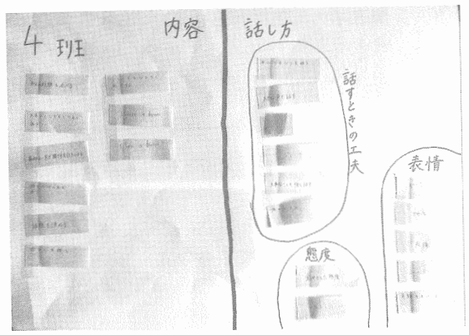

図２：ＫＪ法でまとめた発表でのポイント

それぞれのグループで話し合った形跡や結果を見ると大切なポイントとして考えていることに差異が見られた。思考が深まっていないグループや教師が注目してほしいポイントについて考えていないグループもあった。内容の工夫が少なく言語化できてない班には，多くの工夫が言語化されている班のものを渡した。また，今回のねらいである語句や文を効果的に使うということに関連したものを見付けていない班には，それを見付けている班のものと組み合わせて生徒に返却した。そうすることによってこれからの単元で内容や伝え方を考える視点として自分達で活用していくことができるのではないかと考えた。

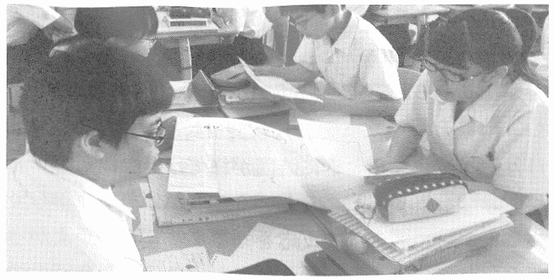

図３：ポイントが書かれた資料を見ながら吟味する生徒の姿

生徒は，テーマを決定し内容を考える時や，伝え方を吟味する場面で，資料として活用していた。

図３は，自らが考えた発表内容をグループの友だちに伝え，意見をもらい自らの発表の吟味をする場面（教科構想でいうところの友だちモニター）である。発表を振り返る時に，項目ごとに立てたポイントを見ながら確認できるようにした。その結果，「言葉（キーワード）を繰り返せば，もっと説得力が増す」とお互いの伝え方のポイントが，共有化され伝わりやすくなったと考えられる。

友だちモニターの場面を設定し，自らの発表を吟味できるようにしたことは見通しをもつための手立て，自分や他者の選んだ方法・手段を吟味する手立てとして有効だったと思う。

(2)「伝え合ったり話し合ったりしたことを振り返り，自分や他者の選んだ方法・手段について吟味する姿」が見られるために行った手立て

発表内容や伝え方をお互いに吟味するときにも言語化した工夫を見られるようにした手立てが有効であった。発表内容を吟味する段階では，原稿を読み，その原稿に書き加えたり修正をしたりする作業が必要になってくる。その手立ての一つとして，原稿用紙の工夫をした。**図４**のように，空白を多くとり，読んだ生徒が書き生徒が書き込み出来るようにした。

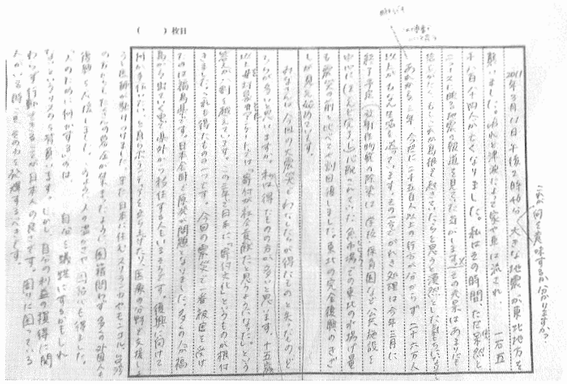

図４：発表内容を吟味しやすくするために原稿用紙の空白を多くした手立て

一つの表現に注目して，評価をしたり適切な表現に直したりできた。友だちのものを修正する中で，ヒントを得て，自らの発表内容を思考したときに，取り入れたり修正したりさらに自らが選んだ発表内容や手段について考えを深めたりしていた。

また，伝え方を吟味する段階では，グループ作りを工夫して，アドバイスや意見をもらいやすく，自分で振り返るだけでは見付けられないような視点を新たに発見できるようにした。そして，行った事前アンケート（**図５**）をもとにして相手意識が持てるように，自分の考えとは違った立場の考えをもつ生徒と意図的にグループを組むように設定した。グループで隣り合わせとなった生徒同士が話者と反対の立場をとる生徒とし，発表内容の確認や話し方について最終検討を行い，付箋に意見を書き，話し手がさらに発表を吟味できるよ

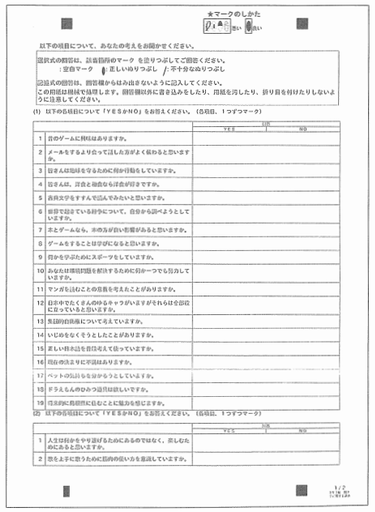

図５：事前アンケート

うに取り組んだ。

発表の場面では，自らの発表がどうだったのかを即時に振り返られるように「クリッカー」と呼ばれるＩＣＴ機器を用いた（図６）。これは，今までの学習で自分の映像を見たときに時間が経てば経つほど話し方の部分に着目してしまうということが分かったからである。即時に聞き手の反応を知ることで，何がよかったのかどこの表現を変えればよかったのかを今回の学習のねらいに即して振り返られるようにした。

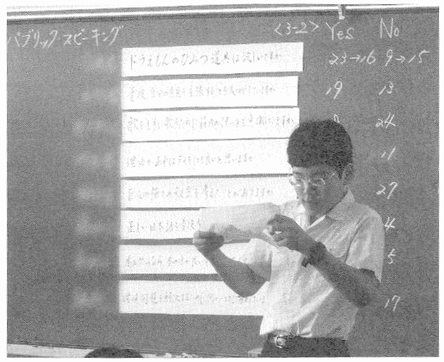

図６：クリッカーによって，聞き手の変化が即時に，数値で分かる

クリッカーは，ボタンを押すことで質問にイエス・ノーで答え，教室全員の意見を集約できるＩＣＴ機器である。事前アンケートの結果を提示し，話し手の発表後その人数がどのくらい変化したのか変化しなかったのかを資料とし，変化しなかったのなら，何がいけなかったのか変化したのなら何がよかったのかを全体で考え，学びにつなげられるようにした。単元の学習後，ふりかえりとして生徒が書いたものを以下に載せる。

○さまざまな工夫点を見つけることができたけれど，やはり一番大切なのは，聞き手とコミュニケーションをとって，巻き込むことだと思いました。そのためには，質問を実際にして答えてもらったり，何度も同じ問いかけをいれたりすることが有効だと思いました。これからも，さまざまなスピーチ活動があると思うので，取り入れていきたいです。（生徒Ａ）

○話し手としては，もっとジェスチャーをつけたり間をとったりなど，工夫できたかなと思いました。他の人のスピーチを聞いて，ジェスチャーや声の大きさなど以外に，キーワードを用いたり，おもしろさを取り入れていくような工夫はとても聞き手をひきつけることがわかった。（生徒Ｂ）

傍線部が，今回の単元のねらいにせまった姿だと考える。

５　おわりに

本単元を終了し，話す・聞く学習において生徒が意欲的に取り組むことができる様々な設定を工夫することが何よりも大切だということがより分かった。「人前で話す」ということは，大人ですら「失敗したらどうしよう」とか，「嫌だなあ」と苦手意識をもつことが多い。発達段階において，周りの視線が特に気になる中学生にとっては「何とかその場を過ごすことが出来ればいいや」という気持ちで学習が過ぎていきがちである。そういう状況の中で，今まで以上にさらに話者として「どうすれば聞き手により伝わるだろう」という問いを持つ為には，目的，聞き手，活動そのものの意味がはっきりと示されないと生徒も意欲的には取り組むことができない。今回，生徒の実態から設定を考え，本単元を組んで，観察ではあるが意欲的な姿で学習に取り組むことができたように感じる。また，意欲を高める一つの手立てとしてＩＣＴ機器の活用は有効であった。クリッカーを提示した時に生徒は興味をもち楽しんで活動できた。反省点としては，クリッカーの結果をもとに皆で考察をしていく時間を本時で設定したが，次の点でうまく活用できなかったように思う。それは，事前のアンケートの問いと発表後に聞く問いと質が違っていて，有効に使えていたかどうかということである。授業協議でも同様の意見があった。意欲を高めるだけでなく，学びにつながる手段としてＩＣＴ機器の活用の仕方について，さらに考えていかないといけない。

また，本単元のねらいとして考えていた「語句や文を効果的に使う」ことは，ほとんどの生徒の発表の中で，工夫され発表に現れていた。しかし，ふりかえりの中で話すことの基礎となる「話す速さ」や「声の大きさ」「態度」を重点課題だと考える生徒が多かった。中学三年生でも，まだ身に付けていないと感じている部分なのだと考えられるが，一部の生徒は「話す速さ」や「声の大きさ」「態度」だけに意識を向けてしまっていて，新しい学習内容まで意識を向けることができていないことが分かった。そこで，話す学習の中で，単元を終えた時に，生徒が新しいこととして何か学んだと実感できるような工夫が必要だと考えた。今後の話す学習の中では以下のことを取り入れながら，さらに研究を深めていきたいと考えている。

・話すことのベースとなる部分は，時間をかけて取り組むことが必要だから日常的な指導として取り入れていく。（毎時間５分間等）具体的には，詩，古文，絵本の一節などを声に出して読むことにより，声を作る，話す速さ等を意識付ける。

・そのベースを学習した上で，話す学習における時間では，指導と評価を明確にする。そして，評価が到達目標として生徒に分かりやすいものであるように心がける。
（今回は，新たに○○を学んだとはっきり生徒が意識できる目標）

・生徒の必要感を高めるために，学校行事，総合的な学習の時期をとらえて特設の時間を設定する。

（文責　鳥屋尾　慎人）